論文

教職員からみたコロナ禍での子どもとのかかわりへの困難さとやりがいに関する研究

石橋　昭子 [1)]

キーワード：コロナ禍、教職員、子どもとのかかわり、マスク、レジリエンス

要旨：

本研究は、岡山県内の教職員 242 人からみたコロナ禍での子どもとのかかわりに関連した困難さとやりがいについて明らかにすることを目的とした。調査は 2023 年 3 月に Google forms による Web 調査を実施した。教職員からみたコロナ禍での子どもとのかかわりの困難さややりがいの自由記述において、最も出現回数が多かった語は「マスク」であった。また共起ネットワーク分析では、1 群は学校・保健室・利用等、2 群は授業・制限・行事等、3 群は顔・表情・マスク等、4 群は出席停止・体調不良・欠席等、5 群は不登校・増える・感染症等の 5 群に分類された。内容分析では、教職員からみたコロナ禍での子どもとのかかわりの困難さは「子どもとの関係構築の困難さ」「欠席や不登校の増加と対応の困難さ」「保健室の使い方の変化」等の 10 項目が得られた。困難さでは、教育現場においてマスクは感染予防対策では重要である一方、コミュニケーションや対象理解への影響が大きいこと、保護者の多様な価値観と教職員の葛藤、養護教諭の感染予防への重責と連携が示唆された。教職員からみたコロナ禍での子どもとのかかわりのやりがいは、「子どもや保護者への支援」「子どもの成長や変化」「必要な行事・活動の工夫」「子どもへの理解とかかわり」等の 9 項目が得られた。やりがいではコロナ禍を乗り越える工夫や成果により得られており、レジリエンスの内的資質（平野,2021）が活かされていることが示唆された。

Ⅰ・はじめに

2019 年 12 月以降に急速に拡大した新型コロナウイルス感染症への対策と対応において、教育現場では従来の教育や生活指導に加えてさらに感染対策、休業期間への対応、授業準備、ICT の導入と活用、保護者も含めた個別支援など具体的対応が増加した。

コロナ禍では子どもの健康管理を担う養護教諭の果たす役割が大きい。戸部（2022）の調査報告では、感染対策と質の高い教育との両立の難しさ、心のケアや学校不適応等への対応について 90%以上が心配・懸念を示しており、児童生徒の学びへの影響や心の問題への対応に対して多くの養護教諭が問題意識を持っていた。

授業に加えて、感染予防対策では昼食場面でもかかわり方の工夫が必要となった。小学校

1)　山陽学園大学看護学部看護学科

の栄養教諭を対象とした塩田ら（2022）の報告では、COVID-19 対策下の給食の時間において、栄養教諭配置群の児童は、感染症リスクに配慮した給食の時間の状況を受け入れながらも、（中略）楽しい給食の時間の在り方、そのために必要な食事マナー、食事に係る人々や自然の恵みへの感謝の気持ちを確認、定着させる機会になっており、黙食における栄養教諭のかかわりが重要であることが示唆された。

その他にも保育の現場では、本田ら（2022）の調査によると、施設スタッフが実際に実施することが難しいと感じた『施設での感染予防』については、子どもの行動に関すること（マスク着用、手洗い、フィジカルディスタンスについてなど）と、施設管理上のこと（保育士の固定、おもちゃの消毒など）、午睡時・食事時の設定が報告されており、日常生活の大部分において求められる感染予防対策の徹底が難しい状況がみられた。

このように学校現場において子どもへの教育と感染予防対策を両立しながらかかわる教職員への役割が期待される。コロナ禍においても教育での工夫をすることでやりがいを見出し、困難な状況を乗り越えることもできるだろう。しかし水野ら（2022）の報告では、教員の子どもの指導に対するニーズである学習活動、問題行動がバーンアウトの因子のひとつである情緒的消耗感に正の影響を示しており、コロナ禍において「学びの保障」「衛生管理」「発達支援」が求められている学校現場では、教職員が疲弊していることが推察された。

そこで本研究では、幼稚園・小学校・中学校・高校・特別支援学級（学校）に勤務する教師や養護教諭、栄養教諭、スクールカウンセラーなどの教職員からみた、コロナ禍における子どもとのかかわりへの困難感とやりがいについて明らかにすることを目的とした。

Ⅱ・研究目的

教職員からみたコロナ禍における子どもとのかかわりへの困難感とやりがいについて明らかにすることを目的とする。

Ⅲ・研究方法

1.研究のデザイン

Web を用いた無記名のアンケート調査による横断研究

2.調査対象

岡山県教育委員会の Web ページに掲載された岡山県内の公立幼稚園・小学校・中学校・高等学校全 802 校のうち休校を除く 757 校の教師、養護（助）教諭、栄養教諭、スクールカウンセラー（以下、SC）で同意が得られた 242 人。

3.調査方法

調査期間は 2023 年 3 月 1 日から 3 月 31 日であった。Web 上の調査管理アプリケーションである Google Forms を用いて Web 調査を実施した。

4.調査項目

1）基本属性：年代、性別、職務の経験年数、現在の所属、現在の主要な役割

2）コロナ禍での子どもとのかかわりの困難さややりがい

コロナ禍での子どもとのかかわりにおいて、困難さややりがいを感じることについて自由記述を求めた。

5.データ分析方法

定量データはIBM SPSS Statistics ver28を使用し、基本属性のクロス集計を実施した。

定性データは樋口（2020）が開発した分析用フリー・ソフトウェアKH Coder3を用いてテキスト型データの計量的分析（計量テキスト分析）による特徴語分析、共起ネットワーク分析を行なった。強制抽出する語の指定は「不登校、保護者、感染対策、感染予防対策、感染防止対策、感染症対策、見えにくい、伝わりにくい、出席停止、感染予防、感染症、コロナ禍、オンライン授業、体調不良、マスク着用、マスクの着用、養護教諭、栄養教諭、風邪症状、給食時間、コロナ前」の21語、使用しない語の指定は「感じる、思う」の2語とし、173段落、258文が確認された。総抽出後数は5,581、異なり語数は993語であった。その内使用された総抽出語数は2,378、異なり語数は785語であった。共起ネットワーク分析は、共起関係（edge）の種類は、描画する共起関係（edge）の選択は「Jaccard」で上位180とした。さらに内容分析を行なった。

Ⅳ・倫理的配慮

説明文には、アンケートは無記名で個人情報は記入しないため、個人の特定や不利益は生じないこと、オンライン調査にかかる費用は調査協力者様の自己負担であること、無記名回答のため回答の送信後は撤回できないこと等を記載した。本研究は山陽学園大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（A2022U011）。本論文に関し、開示すべき利益相反はありません。

本研究における用語の操作的定義

1. 教職員とは、教師及び養護教諭、栄養教諭、スクールカウンセラー（SC）の専門的な資格を有する人とした。
2. 子どもとは、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校（学級）に通う生徒とした。

Ⅴ・結果

1. 対象者の概要（表1）

対象者の属性及び主要な役割と性別・年代・職務の経験年数・所属のクロス表について、表1に示した。

回答数は合計242人、男性62人（25.6%）、女性180人（74.4%）、年代は50歳代が最も多く63人（26.0%）、次いで40歳代61人（25.2%）、20歳代58人（24.0%）であった。経験年数は21年以上80人（33.1%）が最も多く、次いで5～10年47人（19.4%）、5年未満46人（19.0%）であった。所属は小学校105人（43.4%）が最も多く、次いで中学校68人（28.1%）、幼稚園28人（11.6%）であった。主要な役割は教師/講師137人（56.6%）で最も多く、次いで養護（助）教諭81人（33.5%）であった。

クロス表から、性別では養護（助）教諭、栄養教諭がすべて女性、教師では男性4割、女

性 6 割であった。年代では管理職が 50 歳代から 60 歳代、教師/講師と養護（助）教諭は 20 歳代から 60 歳代であった。職務経験年数では、教師/講師と養護（助）教諭では 5 年未満から 21 年以上であった。所属では、教師/講師は小学校が 5 割、中学校が 3 割、養護（助）教諭は小学校 5 割、中学校で 3 割であった。

表 1　主要な役割と性別・年代・職務の経験年数・所属のクロス表　n=242( )内は割合

項目		主要な役割					
		教師/講師	養護(助)教諭	栄養教諭	SC	管理職	合計
主な役割		137（0.57）	81（0.34）	5（0.02）	11（0.05）	8（0.03）	242（1）
性別	男性	56（0.41）	0（0）	0（0）	3（0.27）	3（0.38）	62（0.26）
	女性	81（0.59）	81（1）	5（1）	8（0.73）	5（0.63）	180（0.74）
年代	20 歳代	30（0.22）	26（0.32）	0（0）	2（0.18）	0（0）	58（0.24）
	30 歳代	26（0.19）	14（0.17）	3（0.6）	1（0.09）	0（0）	44（0.18）
	40 歳代	39（0.29）	18（0.22）	1（0.2）	3（0.27）	0（0）	61（0.25）
	50 歳代	38（0.28）	17（0.21）	1（0.2）	2（0.18）	5（0.63）	63（0.26）
	60 歳代	4（0.03）	6（0.07）	0（0）	1（0.09）	3（0.38）	14（0.06）
	70 歳代以上	0（0）	0（0）	0（0）	2（0.18）	0（0）	2（0.01）
職務経験年数	5 年未満	21（0.15）	21（0.26）	0（0）	3（0.27）	1（0.13）	46（0.19）
	5～10 年	25（0.18）	17（0.2）	1（0.2）	4（0.36）	0（0）	47（0.19）
	11～15 年	28（0.20）	10（0.12）	3（0.6）	3（0.27）	0（0）	44（0.18）
	16～20 年	13（0.10）	10（0.12）	1（0.2）	1（0.09）	0（0）	25（0.10）
	21 年以上	50（0.37）	23（0.28）	0（0）	0（0）	7（0.88）	80（0.33）
所属	幼稚園	25（0.18）	0（0）	0（0）	0（0）	3（0.38）	28（0.12）
	小学校	60（0.44）	39（0.48）	2（0.4）	1（0.09）	3（0.38）	105（0.43）
	中学校	34（0.25）	29（0.36）	1（0.2）	2（0.18）	2（0.25）	68（0.28）
	高等学校	12（0.09）	11（0.14）	0（0）	0（0）	0（0）	23（0.10）
	特別支援学校（学級）	4（0.03）	2（0.03）	2（0.4）	0（0）	0（0）	8（0.03）
	小/中学校	2（0.02）	0（0）	0（0）	5（0.46）	0（0）	7（0.03）
	小学校/高校	0（0）	0（0）	0（0）	1（0.09）	0（0）	1（0.01）
	小/中/高/特別支援	0（0）	0（0）	0（0）	1（0.09）	0（0）	1（0.01）
	その他	0（0）	0（0）	0（0）	1（0.09）	0（0）	1（0.00）

2.　コロナ禍での子どもとのかかわりにおける困難さややりがいについて

コロナ禍での子どもとのかかわりにおける困難さややりがいについて 151 人からの自由記述が得られた。得られた自由記述について、1）計量テキスト分析、2）職種別の自由記述の内容分析を行なった。

1） 計量テキスト分析

頻出語は、出現回数 5 回以上の上位 85 位を示した（表 2）。最も出現回数が多かった語は「マスク」で出現回数は 44 回、次いで「生徒」の出現回数は 43 回、「表情」の出現回数は 34 回、「児童」の出現回数は 29 回、であった。

共起ネットワーク分析では、Jaccard 係数の上位 85 を用いた（図 1）。図内の係数は Jaccard 係数（共起の程度）を示し、円の面積は語の出現数と比例する。また最小スパニング・ツリーの表示とした。結果は主に 5 つの語群に分類された。1 群は学校・保健室・利用・学年・職員等に関連したもの、2 群は授業・オンライン・学習・体育・活動・制限・行事等に関連したもの、3 群は読み取る・難しい・顔・表情・マスク等に関連したもの、4 群は登校・出席停止・風邪症状・体調不良・欠席・休む等に関連したもの、5 群は生徒・子ども・対応・不登校・増える・コロナ・感染症等に関連したものであった。

表 2　頻出語（上位 85 位）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
マスク	44	保健室	11	出席停止	7	感情	5
生徒	43	関わり	10	情報	7	感染予防	5
表情	34	大きい	10	生活	7	機会	5
児童	29	不登校	10	同士	7	経験	5
コロナ禍	23	活動	9	オンライン	6	見える	5
子ども	23	顔	9	学年	6	差	5
増える	23	行事	9	休む	6	使用	5
難しい	22	外す	8	行う	6	子	5
学校	20	感染	8	今	6	実施	5
対応	19	欠席	8	子供	6	少ない	5
指導	17	登校	8	弱い	6	職員	5
多い	16	以前	7	状況	6	制限	5
保護者	15	意識	7	新しい	6	声	5
授業	13	家庭	7	抵抗	6	体育	5
困難	12	感染症	7	伝える	6	大変	5
時間	12	関係	7	不安	6	風邪症状	5
コロナ	11	気	7	オンライン授業	5	分かる	5
考える	11	気持ち	7	コミュニケーション	5	抱える	5
体調不良	11	見る	7	コロナ	5	様々	5
読み取る	11	言葉	7	違い	5	利用	5
必要	11	取る	7	学習	5	理解	5
						連携	5

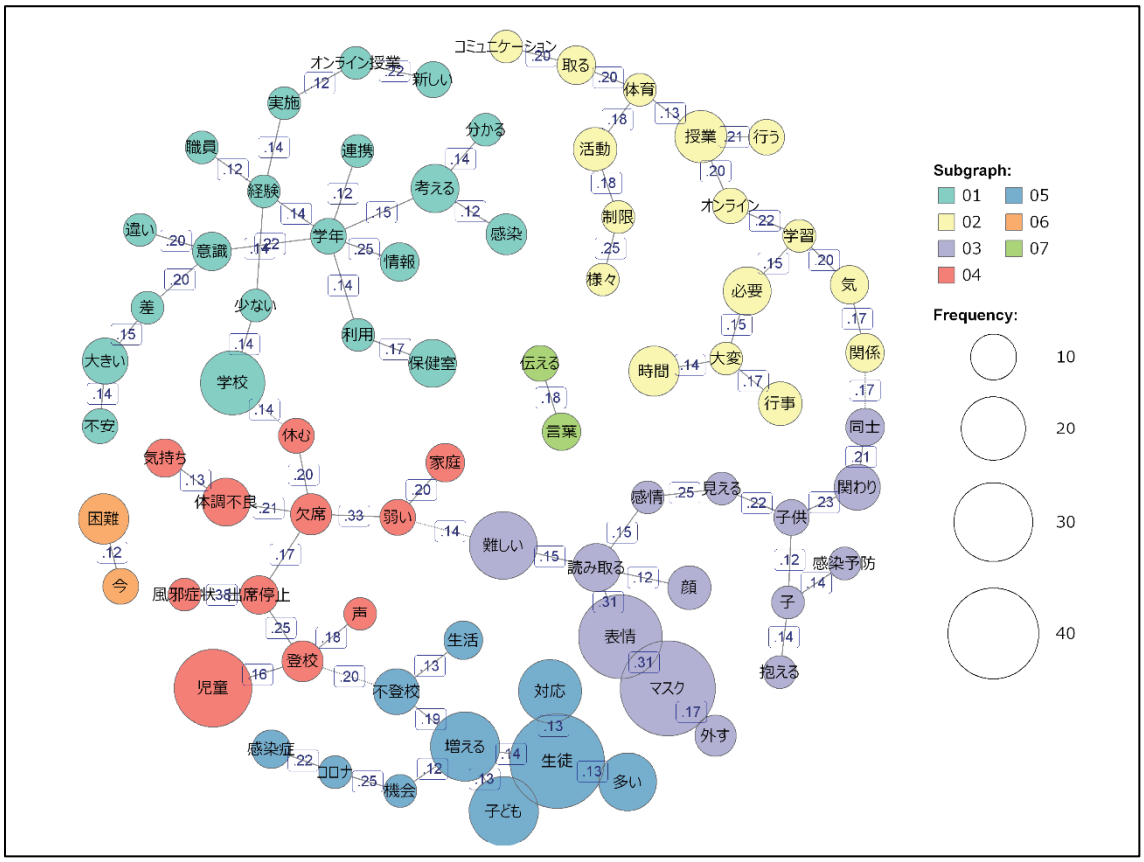

図１　共起ネットワーク図

2）コロナ禍での子どもとのかかわりの困難さややりがい（自由記述）

得られた自由記述は、職種別に教職員からみたコロナ禍での子どもとのかかわり困難さとやりがいについて分類し、表 3 に示した。表内表記の(幼)は幼稚園、(小)は小学校、(中)は中学校、(高)は高等学校、(特)は特別支援学校・学級、(養)は養護教諭、(SC)はスクールカウンセラー、(栄)は栄養教諭を示す。文中の「」は項目を示す。

教職員からみたコロナ禍での子どもとのかかわりの困難さは、低年齢の幼児に感染対策を徹底させることの難しさなどの「感染対策を徹底することの難しさ」、マスク越しのため表情を読み取りにくい、名前が覚えにくい、感情が見えにくい等の「子どもとの関係構築の困難さ」、給食時間は黙食を行っているため食育を行いづらい等の「教育活動への制限」、体育の授業で指導してもマスクを取らない生徒への対応は難しい等の「マスクが外せない子どもへのかかわり」、生徒がより気軽に学校を休むようになった等の「欠席や不登校の増加と対応の困難さ」、感染症対策についての保護者の考え方の違い等の「保護者との関係構築の難しさ」、「メディアやオンラインの悪影響やトラブル」「コロナ禍の変化への適応の困難さ」「保健室の使い方の変化」「感染対策への重責」の 10 項目が得られた。

コロナ禍での子どもとのかかわりのやりがいは、「子どもや保護者への支援」「子どもの成長や変化」「必要な行事・活動の工夫」「教職員との連携による支援」「新しい価値観の発見」、ICT の活用能力は向上した等の「オンラインの有効活用」、「コロナ禍の変化への適応」「子どもへの理解とかかわり」「感染予防の徹底」の 9 項目が得られた。

表 3　教職員からみたコロナ禍での子どもとのかかわりの困難さとやりがい

項目	主な内容
困難さ	
感染対策を徹底することの難しさ	(幼)・低年齢の幼児に感染対策を徹底させることの難しさ。・マスクの着脱のやり取りや時間を確保することが大変・日々変わる状況。 (小)・コロナに関する不安や対応が個人によって違う・マスク着用の指導・体調(熱中症、体育時の呼吸困難など)に注意すること、マスクを取ることを強要しないことなど、こちらが気を遣うことも多い (中)・様々な価値観がある中での感染予防対策の指導・感染防止対策（マスクの着用やアルコール消毒、体温チェック等）の指導に曖昧さがあり、子どもたちも戸惑いがあった。 (高)・感染予防やワクチン接種における価値観の違い・マスクを外すことに抵抗がある生徒がいる一方で、マスクが息苦しく感じる生徒もいた。健康・情緒の面で配慮が必要なわけではなかったのでマスクをするように指導はしていたが、場面によっては外すことが推奨されることもあり、順応しきれないものもいた。 (養)・保護者、教職員、生徒で感染症に対する意識の違いがあり、徹底した対策をとることができにくかった。感染症が広がってしまうことがあった。・健康観察の実施に教員間で差があり、実施率が低いクラスもあった。・コロナになったことを隠したい生徒もいる中で、何も考えずにコロナに罹った？と聞いてくる生徒もおり、指導が大変だった。・人との距離(ソーシャルディスタンス)について、手当てや相談を受けている時に気をつかった。・特性などでマスクの着用ができない児童がいる。給食は黙食となり、食事を楽しむのが難しい児童もいるのではないか。・感染予防をどこまで厳しくしていくのか、各校によって違うところもあり、正解もないのでとても悩んだ。 (栄)・感染防止対策を全校へ周知させることの難しさ
子どもとの関係構築の困難さ	(幼)・マスクで表情が伝わりづらい、体調不良など気がつきにくい、言葉が伝わりにくい、気持ちや感情を読みとることができにくい、幼児にとっても大人の表情が分からないことで不安感があったのではないか・教師の表情を子どもに見せられない・幼児同士は相手の感情を読み取ることが難しかった。 (小)・マスクにより児童の表情の読み取りや、教師が表情によって気持ちを伝えることなどを阻害される、口元が見えないことに困難さ。・ふれあいを大切にしたいが、接触することに抵抗を感じる児童も見られる。どこまで子供同士の関わりを増やすことができるかが課題・子ども同士の横のつながりが弱いので、学級の人間関係づくりを築いていくことが難しい・児童同士の関係もコロナ禍以前に比べて距離がある。保護者も児童も、人間関係に悩むことは増えている。・マスクを外すことや子供同士の関わりの中で起きる不潔（つばが飛ぶなど）をコロナ前よりも過剰に嫌がっている子が多い。 (中)・マスク越しのため表情を読み取りにくい、名前が覚えにくい、感情が見えにくい・コミュニケーションの取り方の困難さを感じ、さらに校外活動や校内活動の制約の中で人との繋がりの体験不足について考えることが多かった。 (高)・生徒の行動力の欠如・表情がわからない (特)・顔が見えないことで子供は大人の関わりを感じにくい・生徒の表情が読み取りにくい。 (養)・マスク利用のため、顔と名前を覚えることにとても苦労した。・マスクをしていて表情が読み取りにくい。・気の合わない人と上手に人間関係を保っていくことが苦手な生徒も多い。・精神的に不安定な児童が浮き彫りになりどのように関わりを持てば良いかアプローチすればよいか困っている。・コロナ禍で対人関係の問題はさらに拍車がかかったように感じる。・行事の縮小等で児童がストレスを抱えやすい。・休み時間の遊び方や、給食の黙食、学校行事も制限されているので、子供たちにとって楽しい！と思える時間が減ってしまった。小さな我慢をたくさんする

	日々で、子どものストレスを感じることが増えた。 (SC)・物理的距離の制限が難しい、子どものスキンシップへの配慮が難しい。・マスクで表情が伝わらず、相手の表情もわかりにくい、言葉以外で感情が伝わりにくい、ジェスチャーを加えた。・子ども同士も「笑われた」「笑ってない」等トラブルに繋がりやすい (栄)・給食時間を楽しくないと感じている児童もいる
教育活動への制限	(小)・体育の授業で身体的接触を伴う活動を行いにくい・発音の仕方や、口の動かし方などをマスクによって言葉で説明することが難しかった。・大きな声を出さないように指導しなければならなかったので、大勢の前で発表することができない児童が増えた。・机を合わせての学習ができない。ハイタッチなど接触できない。・学年単位や、学校単位で集まることが少なくなったため、6年生は他の学年を意識して、お手本になるような経験が少ない・自分だけよければいいという考えの子どもが増えた。みんなですることもやりたくないというようなネガティブ発言が多い。・家族が感染し急にこどもが帰宅しなくてはならなくなり授業に支障をきたすことが度々あった。 (中)・対外的な活動を企画しづらくなった・ちょっとした体調不良でも頑張ろうとしている生徒の応援がしにくい。即下校などの対応になりがち。・大きい声で発言しよう、等を指示しにくい。・前例のないものに対応することもあり、取組による生徒の動きの変容などの想定に苦労した。 (高)・学校外での生徒同士の関わりが希薄になっている。そのためクラス運営にもグループエンカウンターなどの別途取り組みを必要としている。 (特)オンラインでの授業を行うなどの対策をしたが、授業のスピードがとても遅くなった。 (養)・マスク生活なので、本当の表情がわからないのが不安。・コミュニケーションの取り方について、密にならないようにしなければならなかったこと。・体験的な活動（マスクを外すことが必要になるようなもの）ができなかったこと。・感染力の強さを考えると様々な教育活動で制限をかけざるを得ない。・小学校で経験するはずだった行事を経験しないまま中学校へ入学してきたため、本来小学校で指導されているはずのマナー等が全く身についていない。・体調不良を訴えた生徒を、学校に留めずに、早退させることが多くなり、本来なら、授業を受けさせることができるのにと、矛盾を感じることがある。・別室対応や保健室対応などの希望があっても、人手がなく、十分に対応できない。ケース会を開催する時間が不足している。 (栄)・給食時間は黙食を行っているため食育を行いづらい・調理実習ができない
マスクが外せない子どもへのかかわり	(小)・思春期の子どもたちはマスクを外すことに抵抗がある・マスクを取ることに抵抗を示す児童もいる・暑い時期のマスクの着用について、熱中症のこともあり体育の時間や登下校時など、マスクを外すように声をかけたが児童がなかなか外そうとはしなかった。 (中)・熱中症や長距離走の授業でマスクが外せない生徒が増えた・写真などでマスクを外すのを嫌がる生徒が多い・体育の授業で指導してもマスクを取らない生徒への対応は難しい。 (SC)・マスクが外せない子ども（特に女子）が増えた。感染予防という意味ではなく、気持ちの面、周囲との同調的な面でマスクを外せない子どもが増えたように思う。
欠席や不登校の増加と対応の困難さ	(小)・本人や家族が風邪で、休まなければならなかったり、欠席扱いにならなかったりで、学校を休むことに抵抗はなくなってきているように思う。 (中)・体調不良の場合は、学校を休むことが奨励されてしまったため、長期欠席の生徒がより一層増えてしまった。そして、登校するよう積極的に声かけをすることも難しくなった。 (高)・コロナ感染予防の名目で出席停止扱いになり、学校に登校しないことに対して、生徒の抵抗が少なくなった。・生徒がより気軽に学校を休むようになった。

	(養)・風邪症状であれば自己申告で出席停止となるため、不登校やサボりとの見分けがつきにくく指導しにくい。・苦手なことややりたくないことから避けるために、かぜ症状を理由とした早退や出席停止が目立つ。ときには休養も大切と伝えつつも頑張りと休養のバランスが取れていない現状に悩む。・コロナ禍において、おうち時間が増えたことによる家庭での生活の充実のおかげもあって、不登校が増えていること。・生徒の不登校や、集団不適応、ストレスへの対応スキルの低さなど、心の健康が心配なケースはたくさんあるし、以前より増えているという実感はある。しかしそれらがコロナ禍に起因するものかわからない。・出席簿上では出席停止になっているが、実際は登校しぶりの、隠れ不登校のような児童が多数いる。登校刺激をしたくても、風邪症状と言われると、こちらも動きにくく、ここ数年で不登校児童が増えてしまった。
保護者との関係構築の難しさ	(幼)・感染症対策についての保護者の考え方の違い。・家庭ごとに認識の違いがあること。 (小)・保護者と会う機会が少なくなり、十分な信頼関係を築けていないこと。・コロナ対策への思いや抱える背景が、各家庭で違う。すべての保護者や児童に納得してもらえる対応が難しい。 (養) ・コロナでの欠席を機に、不登校傾向になるケースがあり、保護者の押し出す力が弱い、電話が繋がらない、長期欠席になる。・少しの体調不良や、家族の体調不良でも登校を控えてもらうような状況下のため、欠席数は増え、期間も長くなり、不登校やその傾向のある児童は増加しているが、家庭訪問などは難しかったり、声掛けの程度も難しかったり、サポートが弱くなりがちに感じる。 (高)・保護者の不平不満。
メディアやオンラインの悪影響やトラブル	(中)・コロナ禍でメディアを使用する機会や時間が増えたことで、生徒指導案件が増加傾向にある。遠隔で、誰とでも、いつでも繋がれるメリットはあるものの、ＳＮＳ上のみの繋がりしかない生徒もいる。 (養)・コロナ禍になり、以前も多かったメディアの使用が更に増加した。長時間のメディア使用が、基本的な生活習慣の確立に大きく関わっている。・気の合う人とのみ SNS で人間関係を築き、学習もアプリででき、学校への必要感を感じない生徒が増えた。・SNS でのトラブルが増えたり、ゲームに感情移入するあまり現実が見えなくなっている生徒もいる。介入が難しい。 (SC)・コロナ禍により、オンライン学習、インターネットの利用に関する意識に関して個人差が大きくなった。ゲーム依存の取り扱いと絡んで自分の意識の基準を置く場所が難しい。
コロナ禍の変化への適応の困難さ	(幼)・コロナ禍でのやりがいは感じない。・全職員の協力体制。意識の違い。 (小)・リモートで学習を進める上で、必要な様々な知識や時間が十分でなくて大変だった。・オンライン授業の内容を充実させることが必要。・ICT の活用技術についていっていない。 (中)・学校行事を以前のようなフルスペックで行ってほしいという保護者の意向と、働き方改革を前提にスリム化をはかる教員集団との調整が困難。・コロナの現状と出来る出来ないの判断 (高)・3 年間のコロナ禍で教育活動が大きく変わった。ＩＣＴの導入によりオンライン授業の開始など新しいことが始まり、我々も多くの勉強をしないといけないと同時に、生徒の心の問題も多くなってきた。この事により日々の業務に膨大な時間を取られてしまう。 (養)養護教諭の研修会がオンラインになり、情報交換の場がなく他校の情報が聞けなくなった。 (特)コロナ禍 1 年目は休校になるなど先の見えない状況だった
保健室の使い方の変化	(養)・コロナ前は保健室来室時に体調不良だと保健室で休養できていたが、今は即早退になっている。これにより、精神的な面が隠れているのかどうかなど背景をゆっくり聞き取りできる時間がなくなり、問題を把握しにくくなった。・以前は保健

	室が気軽に利用できる場だったが、コロナ禍においては不調者、発熱者が利用するため一番緊迫感の強い場所となった。なんとなく来室していた生徒の居場所にはならなくなり、生徒の把握がしづらくなった。・コロナ禍では保健室の使用の仕方が、常に迷い、困っていた。（感染を疑われる児童来室時や迎えを待つ間の対応等）・感染予防を重視しないといけなかったため生徒を保健室で休養させることができなかった。・保健室には様々な訴えで生徒が来室する。コロナウイルス感染症の疑いの高熱、体調不良、ケガ、気持ちの不安定、ケンカなど。本当にキツイ状況を３年間続けている。・体育や部活動での怪我（骨折など）がとても増えた。・校内の保健室ルールの徹底ができていない。
感染対策への重責	(養)・コロナ自体が未知の感染症であるのに、養護教諭＝感染症の専門家、と思われていて、意見や判断を求められる機会が多く、責任の大きさに押しつぶされそうだった。・新しい感染症ということで、今まで行ってきたことのない対応が求められ、さらには養護教諭の知識も求められた。
やりがい	
子どもへの理解とかかわり	(養)・精神的に不安定でイライラや沈み込んだ様子の生徒に対して本人の強みを言葉にして伝えると基本的には全否定ですが定期的に訪れている。何か満たされないものをほんの少し埋めるくらいには役立っているのかもしれないと思う。・コロナ前に比べ、相談による保健室来室者は確実に増えている。話を聞くことや生徒理解に関しては非常にやりがいを感じる (SC)コロナ禍ではなくてもレジリエンスを育成する視点は大切であるし、できるだけ年齢が低い時から身につけさせたいので、保護者への心理教育も、就学前からできるといいと思う。
感染予防の徹底	(養)・コロナ感染予防対策を徹底させることで、少しでも感染者が少なくなるように常にコロナ感染に関する新しい情報を収集し、それを児童や教職員へ伝えるなどして学校一丸となって予防に取り組めた。
子どもや保護者への支援	(幼)・体を動かして遊ぶことの大切さを伝えることができた。・言葉で伝える方法など模索した。 (小)・オンラインの授業を、併用したことで長期欠席した児童がいた後も学習の進度を気にせず進めることができ良かった。保護者からも感謝されやりがいを感じた。・児童がストレスを抱えないように分かりやすい授業を行うことにやりがいを感じる。 (中)・しんどさを抱えている子や保護者の方に寄り添い、学校の支援体制を作っていくことにやりがいを感じる
子どもの成長や変化	(小)・コロナの影響でできないことや条件付きが増えたので、行事ができることが当たり前ではなくなり、自分たちで計画して実行する力は向上した・オンライン授業に対して想像以上に柔軟に対応できる児童の成長が素晴らしいと感じた。・活動制限の中での子どもたちの工夫 (中)・コロナ感染が広がり始めた頃は、子どもたちもどうしていいか分からない様子だったが、次第に、自分たち自身で考えて行動できる機会が増えてきた。・行事をやり遂げた子どもたちの表情はコロナ禍を乗り越えたすがすがしいものとなっている。 (高)・色々な制約があり不安に思うことも多かったが、みんなで乗り越えようという気持ちが大きくなり、チームの団結力や結束力は高まった。 (養)・子どもが一つ何かを乗り越えた時、この職業にとてもやりがいを感じる。・ちょっとした言葉がけで、子どもの気持ちがポジティブな方向に向いてくれた瞬間にはやりがいを感じる
必要な行事・活動の工夫	(幼)・コロナ禍でも工夫して行事ごとを進めて行くことが大変であったが、運動会や発表会などを終えて子どもの成長が見られたときはやりがいを感じた。 (小)・制約の中で児童が達成感を感じることができる指導目標、指導内容の設定・学校行事を中止せず、できる形に変更することが大変だった。子供の楽しみや経験

	を少しでも維持するために、職員でアイデアを出し合い、実施することができた。・６年生を送る会では、６年生が各教室を巡る形を取った。これまでと違った形で児童も喜んでくれた。 (中)・コロナ禍であっても、できるだけ行事を実施した。
教職員との連携による支援	(小)・情報整理をし、正しい知識による判断をみんなですることで、知恵や工夫で乗り切ることができる・制限がある中で、担任、栄養教諭、養護教諭等、様々な職員と連携して授業等の指導ができた・チームで情報共有し、効果的な支援ができ、回復が見られた時は嬉しい。 (養)・SCへの相談や、教職員との連携を密にし、寄り添うことを心がけた。・担任や学年、SCとの連携や情報共有を、通常以上に意識した。・精神的な不安定さや生活の不規則さから体調不良を引き起こし、保健室利用が増えている生徒や不登校気味の生徒等に対し、担任や養護、SC、学年団、生徒指導部が情報共有し対応を考えてその生徒と接していく、チームとしてのあり方はとてもやりがいを感じる。一人ではできないこともみんなとなら頑張れるし、対応しやすくなる。が同時に、先生一人ひとりの負担がとても大きくなるので、ジレンマを感じる。
新しい価値観の発見	(小)・コロナ禍でもできることを考え、新しいことに挑戦していけること。それにより、児童の生き生きとした顔が見られたこと・知恵を出し合いながら、安全面を最優先した取組を考え、提案すること・どんな状況であれ、考え方を前向きに転じていくようにすることで、生きぬこうとする力を引き出すことができることに気付いた。 (中)・オンライン授業の実施を通して、多様な学びの場がある事を実感して、教室に行く事にこだわりすぎないようすべきと感じた。 (高)・今まで当たり前に集会していたが、始業式など、集まらなくても良いのではと思うことが増えた。本当に必要なことは何かを考えるきっかけになった。
オンラインの有効活用	(幼)・園にもWi-Fiやタブレットを設置でき、保育中の振り返りに写真を使って振り返りをしたり、おり紙の折り方を大きく画面に映し出したりするなど、活用方法を模索している。 (小)・一人一台端末を使用した授業づくりにやりがいを感じている。・オンライン授業など新しい授業形態にチャレンジすることにやりがいを感じた。ICTの活用が進んだ。・必然的に全教職員がＩＣＴについて理解を深め、オンライン授業などできるようになった。 (特)ICTの活用能力は向上した (養)・コロナ禍なので、今までしてきたことができない状態にしないために、全学年や学年ごとにzoom配信で出来ることは勧めることを考え、喜ばれている。 (SC)・全員がタブレットを持ったことで、不登校の子どもがオンラインで授業に参加でき、連絡事項を見ることができた・オンラインで１年間カウンセリングを継続できた。・タブレット学習の普及で学習方法が変化したことについての知見を知りたい。 (栄)・動画配信やオンライン配信など、新しい技術を身につけることができた
コロナ禍の変化への適応	(小)・コロナだからといって、特に変わったことはない (特)ここ２年間はコロナ禍での学校生活に順応しており、困難はない。 (SC)・「コロナ禍が直接的原因となって発生している問題」というのは少ない。・コロナ禍に限ったことはない

表３のコロナ禍での子どもとのかかわりの困難さとやりがいの項目を表４に整理した。

困難さについて、教員と養護教諭・SC・栄養教諭との共通項目は、「感染対策を徹底することの難しさ」「子どもとの関係構築の困難さ」「教育活動への制限」「マスクが外せない子どもへのかかわり」「欠席や不登校の増加と対応の困難さ」「メディアやオンラインの悪影響

やトラブル」の 6 項目であった。教師のみの項目は「保護者との関係構築の難しさ」「コロナ禍の変化への適応の困難さ」であった。「保健室の使い方の変化」「感染対策への重責」では、全て養護教諭の記述であった。

やりがいについて、教員と養護教諭・SC・栄養教諭との共通した項目は、「子どもの成長や変化」「教職員との連携による支援」「オンラインの有効活用」「コロナ禍の変化への適応」の 4 項目であった。教師のみの項目は、「子どもや保護者への支援」「必要な行事・活動の工夫」「新しい価値観の発見」の 3 項目であった。養護教諭・SC・栄養教諭のみの項目は「子どもへの理解とかかわり」「感染予防の徹底」の 2 項目であった。

表 4　コロナ禍での子どもとのかかわりの困難さとやりがいの項目

困難さ（10 項目）	やりがい（9 項目）
「感染対策を徹底することの難しさ」	「子どもの成長や変化」
「子どもとの関係構築の困難さ」	「教職員との連携による支援」
「教育活動への制限」	「オンラインの有効活用」
「マスクが外せない子どもへのかかわり」	「コロナ禍の変化への適応」
「欠席や不登校の増加と対応の困難さ」	「子どもや保護者への支援」
「メディアやオンラインの悪影響やトラブル」	「必要な行事・活動の工夫」
「保護者との関係構築の難しさ」	「新しい価値観の発見」
「コロナ禍の変化への適応の困難さ」	「子どもへの理解とかかわり」
「保健室の使い方の変化」	「感染予防の徹底」
「感染対策への重責」	

Ⅵ・考察

コロナ禍での子どもとのかかわりにおける困難さややりがいの自由記述について計量テキスト分析を行った結果、頻出語（上位 85 位）では、「マスク」「生徒」「表情」「児童」等がみられた。子どもを示す語は「生徒」「児童」「子ども」「子供」「子」が散見されており、役割や立場に応じて使用する語を使い分けていることが考えられた。また、共起ネットワーク分析の結果は 5 つの語群に分類された。1 群は学校・保健室・利用・学年・職員等に関連したもの、2 群は授業・オンライン・学習・体育・活動・制限・行事等に関連したもの、3 群は読み取る・難しい・顔・表情・マスク等に関連したもの、4 群は登校・出席停止・風邪症状・体調不良・欠席・休む等に関連したもの、5 群は生徒・子ども・対応・不登校・増える・コロナ・感染症等に関連したものであった。このことから学校現場では、1 群にみられる学校や保健室利用による教職員の連携、2 群にみられる子どもへの教育の制限と工夫、3 群にみられるマスクによる子どもの理解やコミュニケーションの難しさ、4 群にみられる出席制限の増加、5 群にみられるコロナ感染症の増加による影響が示唆された。そして学校教育と感染予防対策や体調管理への細やかな配慮との両立に取り組んでいることが考えられた。

計量テキスト分析の頻出語ではマスクが最も出現回数が高く、共起ネットワークの 3 群は読み取る・難しい・顔・表情・マスク等に関連したものが示された。内容分析でも「マスクが外せない子どもへのかかわり」が抽出されており、学校教育においてマスクの存在は大

きいことが示唆された。また養護教諭では「保健室の使い方の変化」「感染対策への重責」等の学校保健活動の中核を担うことへの困難さが示唆された。さらに教職員の困難さとして抽出された「感染対策を徹底することの難しさ」の背景のひとつには保護者や子どもの多様な価値観や「保護者との関係構築の難しさ」もみられており、保護者との関係構築の工夫が重要であることが示唆された。

以上より、1）コミュニケーションや対象理解に対するマスクの影響、2）養護教諭の重責と連携、3）保護者の多様な価値観と教職員の葛藤、4）コロナ禍での子どもとのかかわりのやりがいとレジリエンス、の 4 つの視点から考察を行なった。

1）コミュニケーションや対象理解に対するマスクの影響

本研究では、計量テキスト分析の頻出語ではマスクが最も出現回数が高く、共起ネットワークの 3 群は読み取る・難しい・顔・表情・マスク等に関連したものが示された。妙木（2021）は、本当に笑っているかどうかは、口の部分の笑いと目の部分の笑いとを対比させて、人の心を読んでいることが多い。だが、マスクはその半分のカギを失うようになっている。対話のパラ言語的な削減の心理学的な影響は深刻だろうし、メンタルヘルスへの影響は無視できないだろうと述べている。内容分析でも、「子どもとの関係構築の困難さ」において、マスクで表情が伝わりづらい、体調不良など気がつきにくい、言葉が伝わりにくい、名前が覚えにくい、感情が見えにくい等の記述がほとんどの施設や職種でみられた。

また本研究では、「マスクが外せない子どもへのかかわり」への困難さもみられ、授業や状況によってマスクを外すように教師が指導しても、マスクを取らない生徒への対応は難しいという記述が散見された。高久と王（2022）は、小学校 4 年生から高校 3 年生までの調査において、座学の時間にこれからもずっとマスクをつけていたいという児童は 25％であったと報告した。さらにマスクを外す様に説得すると逆に外したくないという意向を強めてしまう Backfire 効果が生じると述べている。本研究で、教師が指導してもマスクを取らない生徒への対応は難しいという散見された背景には、Backfire 効果が生じていた可能性が考えられた。マスクによる表情の読み取りにくさやマスクに関連した指導は、教育現場において予想以上に子どもの対象理解や関係構築に影響を及ぼすことが考えられた。

2）コロナ禍での養護教諭の重責と連携

子どもとのかかわりの困難さで養護教諭のみにみられた項目は「保健室の使い方の変化」「感染対策への重責」であった。本研究結果の記述にも、コロナ自体が未知の感染症であるのに、養護教諭＝感染症の専門家、と思われていて、意見や判断を求められる機会が多く、責任の大きさに押しつぶされそうだった、とあるように、コロナ禍の感染予防対策において養護教諭がその役割が期待されていた。養護教諭は、情報共有も難しい中で、保健室は発熱者が利用するため一番緊迫感の強い場所と記述されたように「保健室の使い方の変化」に対応していた。日本健康相談活動学会の報告書（2021）では、保健室経営の在り方の変化により、養護教諭自身が困難さを抱え、疲弊しつつある現状が推察される、と報告しており、本研究と同様の結果が示唆されていた。波多野（2021）は、学校保健活動の中核を担うことは非常に精神的な負担がありながらも、教職員対象の校内研修会や保健指導動画（8 分）を作成し中学生の生徒に上映を行なうなどの校内連携や外部の養護教諭間のコミュニケーショ

ンを通して健康相談の実施や自身の精神的安定にもつながったと報告した。本研究結果と同様に「教職員との連携による支援」において養護教諭の意見では担任や学年、SC との連携や情報共有を、通常以上に意識した、という記述も散見されていた。養護教諭が感染対策への重責を引き受けながら、教職員や養護教諭間との連携を取り、精神的にもサポートし合いながらコロナ禍を乗り越えていたことが推察された。

3）コロナ禍での保護者の多様な価値観と教職員の葛藤

子どもとのかかわりの困難さで教師のみにみられた項目は「保護者との関係構築の難しさ」及び「コロナ禍の変化への適応の困難さ」であった。保護者との関係性では、「コロナ禍の変化への適応の困難さ」でも、保護者の意見と学校の方向性の調整の難しさがみられ、「感染対策を徹底することの難しさ」では感染に対する保護者の多様な価値観への対応、「欠席や不登校の増加と対応の困難さ」では登校に対する保護者のかかわりとの関連も述べられていた。高橋ら（2023）の報告では、コロナ禍において子どもの進路や将来への影響を懸念する保護者は 66.1%にのぼっており、保護者の思いを理解しながら子どもとかかわることが重要である。しかしコロナ禍においては保護者の多様な価値観が浮き彫りとなり、教職員と保護者の間で葛藤が生じやすいことが示唆された。

4）コロナ禍での子どもとのかかわりのやりがいとレジリエンス

子どもとのかかわりにおけるやりがいでは、内容分析においてコロナ禍の「感染予防の徹底」や「教職員との連携による支援」「オンラインの有効活用」による学校教育に取り組み、「子どもへの理解とかかわり」「子どもや保護者への支援」「必要な行事・活動の工夫」を行う中で、「子どもの成長や変化」「コロナ禍の変化への適応」「新しい価値観の発見」が述べられていた。これらはコロナ禍の課題を乗り越えるための必要なことであったと考える。

平野（2021）は、逆境下でも適応できる能力や衝撃から速やかに回復できる能力をレジリエンスとして捉え、レジリエンスの内的資質が広がりを「発掘-増幅」と「他者-個人」の 2 軸でとらえた。この観点から得られた結果を検討すると、「子どもへの理解とかかわり」「コロナ禍の変化への適応」「新しい価値観の発見」では、自己理解による資質の気づき（個人-発掘）であることが考えられた。「子どもや保護者への支援」「子どもの成長や変化」では、他者からのフィードバックによる資質の気づき（他者-発掘）であることが考えられた。「感染予防の徹底」「オンラインの有効活用」では、新たな知識やスキルの獲得による資質の発現（個人-増幅）であることが考えられた。「教職員との連携による支援」「必要な行事・活動の工夫」では、他者との関係性による新たな資質の発現（他者-増幅）であることが考えられた。

コロナ禍の状況において感染予防を行い、子どもへの理解を深め、保護者や教職員と連携を取りながら、学校教育の質を保つことにおいて、多くの困難さや課題があることが明らかとなった。しかし教職員は子どもとのかかわりにおいて、さまざまな工夫や協力を得て活用や連携を取りながら、レジリエンスの内的資質の広がりにおいてその役割を果たしてきたことが示唆された。

謝辞

本研究にあたり、大変ご多忙の中、調査にご協力いただきました岡山県内の公立幼稚園・小学校・中学校・高等学校の教師、養護教諭、スクールカウンセラー、栄養教諭、管理職の皆様に心より深く感謝致します。

なお、本研究は山陽学園大学令和 4 年度学内研究補助金によって実施しました。

引用参考文献

塩田良子 鈴木麻希 渡壁奈央 熊谷陽子 門戸千幸 遠藤雅子 大田 和子 石本有士 杉山寿美(2022).COVID-19 対策を講じた給食の時間に対する児童の思いと栄養教諭の食に関する指導の関係.県立広島大学地域創生学部紀要 1,1-12 .

波田野 希美(2021).新型コロナウイルス感染症から問い直すこれからの学校教育と健康相談のあり方 コロナ禍の学校における新規採用養護教諭の行う健康相談・健康相談活動の実践.日本健康相談活動学会誌 16(1-2), 13-16.

平野真理　資質を涵養するパーソナリティ心理学　臨床心理学 17(5)　2017　669-672

樋口耕一（2020）．社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して 第 2 版 ナカニシヤ出版

本田順子 涌水理恵 小林京子 平田美佳 後藤あゆみ 望月梢絵(2022).保育園・幼稚園を対象とした COVID-19 感染予防に関するアクションリストの実装に向けて(第 2 報).外来小児科 25(1),62-66.

髙橋智 田部絢子 柴田真緒 石川衣紀 内藤千尋 能田昴 コロナ禍における子どもの「生活・学習・発達」の困難と支援ニーズ―全国の小中高校生調査から-　日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要 105　2023　1-16

高久玲音，王明耀　ポストコロナに向けた子どもたちの学校生活の現状―2022 年 6 月の学校生活調査の結果と予備的解析―　社会保障研究 7（3）2022　224-235

妙木浩之　新型コロナ禍、パンデミックの心理学　精神療法 47(2)　2021　7-13

日本健康相談活動学会 理事・幹事三木とみ子　他 22 人　第 3 回 COVID-19 に伴う養護教諭の実践に関するアンケート報告書　日本健康相談活動学会 令和 3 年（2021 年）8 月 6 日（力丸真智子 p123）https://jahca.org/wp-content/uploads/2023/04/210806_covid-19_vol3.pdf（閲覧日：2024 年 1 月 20 日）.

水野治久 梅川康治 糸井川孝之 佐々木靖(2022).ウィズコロナ時代における小中学校教員の学級経営におけるニーズと情緒的消耗感との関連 若手教員を対象として.大阪教育大学紀要 70, 35-42.

戸部秀之(2022).学校における新型コロナウイルス感染症対策の実施状況と課題 2021 年度当初における養護教諭を対象とした調査より.学校保健研究 64(2),135-145.